

SHOW HEY シネマール-4

★★★★★

花筐／HANAGATAMI

2017年／日本映画
配給：新日本映画社／169分

2018（平成30）年1月28日鑑賞 大阪ステーションシティシネマ

Data

監督：大林宣彦
脚本：大林宣彦／桂千穂
原作：檀一雄『花筐』（講談社・文藝文庫）
出演：窪塚俊介／矢作穂香／常盤貴子／満島真之介／長塚圭史／山崎紘菜／柄本時生／門脇麦／村田雄浩／武田鉄矢／入江若葉／南原清隆／小野ゆり子／岡本太陽／豊田邦子／原雄一郎／根岸季衣／池畑慎之介

👁️👁️ みどころ

大林宣彦監督の名前は知っているも、今や『夕日と拳銃』や『花筐』はもちろん、檀一雄という作家も知らない日本人が多いだろう。そもそも本作のタイトルを「はながたみ」と読める人は？その時代背景を知っている人は？

青春群像劇はたくさんある。黒澤明監督の『わが青春に悔なし』（46年）はもちろん、戦後大流行した石坂洋次郎の原作で何度も映画化された『青い山脈』もそうだが、本作にみる戦争直前の大学予科生4人の青春とは・・・？

男はみんな軍隊に入るもの。そして、軍隊に入るとはすなわち死ぬこと。それが当たり前だった時代。いかにもお金持ちのお坊っちゃん風の僕を含め、それに対置される3人の予科生たちの生き方（死に方）を、平和で安全かつ豊かな今のニッポン国に生きる若者はどう考えるの？

末期ガンと闘う中で完成させ、ガンを駆逐した大林監督の気力に感服するとともに、遺作になるかもしれない本作のメッセージをしっかりと受けとめたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■これぞ大林流の映像美！とりわけ赤色の見事さに注目！■□■

私は特に大林宣彦監督のファンというわけではないが、『転校生』（82年）や、『時をかける少女』（83年）は観ている。しかし、本作によって完成した「大林の戦争三部作」と呼ばれる『この空の花—長岡花火物語』（11年）も、『野のなななのか』（14年）も観ていない。

大林監督は「映像の魔術師」と呼ばれているが、本作は冒頭からそんな魔術師ぶりがすごい。今の邦画は明るく綺麗な色で、一定の距離を保って撮影するオーソドックスなもの

がほとんどで全然面白くないが、本作は映像の美しさの種類が全然違う。そのうえ、大林監督流のクローズアップが多いうえ、張藝謀（チャン・イーモウ）監督ばりの（？）色彩へのこだわりがすごい。とりわけ、本作の象徴となる①花の赤さや②血の赤さ、そして、青春群像劇たる本作のリーダー役となる美しき叔母・江馬圭子（常盤貴子）が後半に見せる③まっ赤なドレスの赤さは印象的だ。また、陳凱歌（チェン・カイコー）監督の久々の日中合作の大作『空海 KU-KAI 美しき王妃の謎』（17年）はファンタジー性が強すぎて少しマンガ的になってしまっていたが、本作のファンタジー性はほどほど・・・。

血をめぐる本作のさまざまなシークエンスを観ていると、結核の従妹・美那（矢作穂香）の血を吸う圭子は、ひょっとしてドラキュラ・・・？

■原作は檀一雄唯一の純文学！タイトルの読み方は？■

今の若者は女優の檀ふみは知っているも、その父親で小説家の檀一雄は知らないはず。それは、今でもテレビによく出ている阿川佐和子は知っているも、その父親で小説家の阿川弘之を知らないのと同じだ。もっとも、映画『火宅の人』（86年）の公開によって、「無頼作家」檀一雄の名前も少しは知られたが、私が中学生時代に胸を躍らせながら読んだ『夕日と拳銃』（55年）はほとんどの人が知らないだろう。そんな私ですら、「私小説」ばかり書いていた檀一雄の出世作にして、唯一の「純文学」である『花筐』は知らなかったし、何よりそのタイトルを「はながたみ」と読むことすらできなかった。

もっとも、この「筐」は中国語で「kuang」と発音するもので、私が愛用しているカンオ電子辞書「中日大辞典」には「竹あるいは柳の枝で編んだかご、竹かご、柳かご」と解説されている。劇場での本作の鑑賞は年配者ばかりで、約4分の1の入りだったが、私を含めてこれらの年配者の多くもこの字は読めないだろう。したがって今どき、こんな難しい字を読める若者は1人もいないのでは・・・？

■4人の主人公の人物像に注目！■

それはともかく、『花筐』は1937年に出版された檀一雄の「処女作品集」に収められた小編で、彼が24歳の時の作品。三島由紀夫が少年時代に愛読したそうで、ネット情報には「内容はほとんど尾崎豊の『15の夜』である」との「解説」すらある。同作は当時の佐賀県の唐津にあった大学予科に入学したばかりの17歳の4人の男（少年？）榊山俊彦（窪塚俊介）、鶴飼（満島真之介）、吉良（長塚圭史）、阿蘇（柄本時生）の青春群像劇だが、同作を特徴づけているのは何といても同作が書かれた1936年（昭和11年）という日中戦争から太平洋戦争に突入する直前の時代状況だ。

大学予科に入学する時から既に、戦争に行つて死ぬことを当然のことと運命づけられていたことは、檀一雄や彼が小説の中に登場させた榊山俊彦、鶴飼、吉良、阿蘇たちのような知的欲求の強い当時の日本男児の生き方にどのような影響を与えたのだろうか？『夕日

と拳銃』の主人公・伊達麟之介は満州の地で「馬賊」となって悠々と生きていくことに生きがいを見出したが、それは檀一雄が43歳となり、満州浪人も悪くないと思った時代なればこそその人物像。檀一雄だって、『花筐』を書いた24歳の頃は、同世代で早世した中原中也やフランスの詩人アルチュール・ランボーと同じように繊細で傷つきやすい神経を持っていたはずだ。そんな時代状況を考えると『花筐』で描かれた4人の主人公たちの人物像は興味深い。本作の鑑賞については、まずはそんな檀一雄の原作に注目。そして、4人の主人公たちの人物像に注目！

■□■1941年当時の大学予科生の青春は？生き方は？■□■

原作は1936年（1937年の日中戦争突入の前年）当時の4人の大学予科生を主人公にしたものだが、大林監督はそれを1941年（12月8日に対米戦争が始まった時）に移している。当時の小、中、高と大学の制度が戦後のそれと異なっているのは当然で、唐津にある大学予科に僕こと榊山たちが入学したのは17歳だ。そのため、満島真之介と柄本時生はともかく、36歳の窪塚俊介、42歳の長塚圭史が17歳の予科生を演じたのは少し無理筋だが、2人ともかなりの「変わり者」だから、ストーリーの進行につれて、違和感がなくなってくることに……。

ちなみに、戦後の民主化の流れの中で作られた黒澤明監督の『わが青春に悔なし』（46年）は京大の「滝川事件」をテーマとした興味深いものだったが、その時代設定は1933年（満州事変の2年後）で、日本が戦争へとひた走っていく中での青春群像劇だったから、その点では本作の時代状況と共通している。

■□■青春時代の感受性は？学友との出会いは？■□■

本作はアムステルダムに住む両親の元を離れ、唐津に住む美しい叔母と婆や（入江若葉）、そして肺病をわずらう従妹の美那たちと暮らす榊山の語りからスタートする。私はいかにも金持ちのお坊っちゃん然としたこの榊山に好感を持ってないが、それでも榊山の感受性はすごい。もともと、いくら「さあ、お飛び、お飛び」と言われても、崖の上から海の中に飛び降りることができないのは当然だが、1903年当時の感受性豊かな旧制一校生であった藤村操が華嚴の滝で投身自殺したことを考えれば、それも1941年当時の大学予科生たちが憧れた「肝試し」のひとつだったかも……？そんな面白いシークエンスから始まる本作では、スタートしたばかりの大学予科生活で榊山の学友となる鶉飼、吉良、阿蘇のかなりひねくれたキャラクターをしっかりと確認したい。

これを観ていると、私が愛光中学に入学した1961年、大阪大学に入学した1967年、そして、司法試験に合格し、司法研修所に入学した1972年という3つの時代での私なりの新しい「学友」との出会いが昨日のこのように思い出されてくる。今では、いくら親しい友人でもその友人との間に一定の距離を置くことがルールのように考えられて

いるが、私の青春時代は？そしてまた、榊山たちが青春を生きた1941年当時は・・・？

■□4人のうち、長く生き残るのは誰？■□

本作には、美しき叔母・江馬圭子の家に住む従妹の美那をはじめとして、その「学友」の美女、あきね（山崎紘菜）と千歳（門脇麦）が登場し、ちょっとした「苧模様」（のまね事？）もを見せてくれるので、それにも注目。私が興味を持ったのは「千人針」ならぬ、ハチマキへの「口紅塗りの儀式」だが、当時ホントにこんな儀式があったの？

チャン・イーモウ監督の『HERO（英雄）』（02年）（『シネマルーム5』134頁参照）では赤色のみならず、青色、白色が強調され、『LOVERS（十面埋伏）』（04年）（『シネマルーム5』353頁参照）では緑色が強調されていたが、本作で強調されるのは赤色。本作で表現される赤色は、花の赤と血の赤がメインだが、戦争に行く若者のハチマキに塗った口紅の赤の効用は・・・？

それはともかく、いかにも金持ちのお坊っちゃん然として、周りの学友からの影響を受けやすいタイプ（？）の僕に対して、他の3人はキャラが強い。まるでアポロ神のように雄々しい肉体を持つ鶺鴒、いつも斜に構え頭を揺らす虚無僧のような吉良、懸命にお調子者を演じる阿蘇が本作でみせるキャラはそれぞれ興味深い。しかし、病を抱えた吉良はもともと命が短そうだし、逆に肉体的に100歳まで生きられそうな鶺鴒はいつか三島由紀夫のようになるのではないかという心配がある。そして、阿蘇はあの時代の最も標準的な若者だろうが、軍隊に入れば多分消耗品として一番に戦死・・・？彼らにはそんな運命が待ち受けてそうだが、さて僕は戦争の時代に入るとどう生きるの？それはもちろんわからないが、戦後長く生き残ったのは4人のうちの誰・・・？

■□唐津くんちに注目！■□

私は「祭り」に詳しいわけではないが、2001年に西天満3丁目に自社ビルを建てた時から、町内会活動に参加するようになったため、必然的に日本三大祭りの一つである「天神祭」との縁が深くなった。西天満は神鉦講で、私も息子も天神祭では陸渡御列に羽織袴で参加した。また、高校時代まで過ごした松山でも小学生の時は毎年地元の祭りに参加し、御輿を担いでいた。そんな私の目には、本作にみる唐津市の「唐津くんち」は興味深い。くんちには、長崎くんち、博多くんちと唐津くんちの3つがあり、「日本三大くんち」と呼ばれているが、本作の「唐津くんち」で大活躍するのは4人の男たちではなく、料理屋の娘、あきねだ。

あきねの兄（原雄次郎）も出征していったが、日本が真珠湾攻撃を開始する直前の1941年の夏という時代でも、唐津くんちではあれだけの賑わいとあれだけのご馳走があったとは大きな驚きだ。唐津は佐賀県だが、九州といえば何と何とでも『無法松の一生』が有名で、北九州市の小倉で開かれる小倉祇園祭では、祇園太鼓が有名。それに比べれば、

唐津くんちの認知度は低く、私もよく知らなかったが、本作を鑑賞すればそれはバッチリだ。

本作に登場するのは平和で安全、かつ豊かな今の時代の唐津くんちではなく、開戦直前の1941年夏の唐津くんちだが、そんな時代なればこそ、一人一人の若者が自分（の死）と向き合いながら参加もしくは不参加にしていた唐津くんちの意味を、本作でしっかり考えたい。

■□ひょっとして、大林監督の遺作に？■□

2018年に入ってすぐの1月6日に突然、星野仙一監督死去のニュースが流れた。その第一報の時は死因が報じられていなかったが、その後のニュースで膵臓ガンだったことと、死亡までそれは内密にされていたことが報じられた。前年の11月28日に開催された「星野仙一氏野球殿堂入りを祝う会」では、少し弱っていたが立派に「あいさつ」をしていただけに、こんなに早く死亡するとは誰も予想していなかったはずだ。ひるがえって、私は2015年9月に直腸ガンの、2016年11月に胃ガンの手術を受けたが、いずれも「ステージ1」で、その後の転移もなく、死の恐怖は今はない。しかしそれでも、いざ手術を受ける時の不安は・・・？また、手術後の定期検診のたびに持つ不安は・・・？

そう考えると、1938年生まれの大林監督が、「ステージ4」の肺ガンだと診断され、余命3カ月の末期ガンだと宣告された中で、本作を完成させたのはすごい。彼が唐津の病院で末期ガンの宣告を受けたのは、2016年8月25日。本作のクランクインの当日だったらしい。普通なら、その時点で長期入院を余儀なくされるため、映画撮影は中止とされるはずだが、彼は東京と佐賀の医師の連携プレーで新薬の抗がん剤を投与されながら、病院から撮影現場に毎日通ったらしい。檀一雄の息子で、本作のプロデューサーを務めた檀太郎氏の表現によれば、「監督の生に対する欲望の凄まじさに癌は押しつけられた」そう。檀太郎氏も大林監督と同時に肺ガンの告知を受けたそうだが、こちらは末期ガンではなかったため手術での除去で終了したらしい。ちなみに、檀一雄が63歳で亡くなったのも肺ガンらしいから、この3人を取り持つ最大の縁は肺ガンということになる。

映画製作はクランクアップで終了ではなく、そこから編集作業がはじまるが、大林監督はクランクアップ後、半年の歳月をかけてモンタージュを終えたそう。そして、その時点では大林監督の死に取りついていたガンも退散したそう。

そうすると、大林監督は次回作へ向けて新たな企画を・・・？おいおい、それはいくらなんでも早すぎるだろう。私としては、本作が大林監督の遺作とならないことを願うばかりだが・・・。

2018（平成30年）年2月7日記